

青少年の性感染症に対する意識

河野 美 香

河野美香レディースクリニック

(平成13年11月30日受付)

近年、青少年の性感染症罹患率が著しく上昇している。この原因のひとつには彼らの性感染症に対する意識に問題があるのではないかと考え、中・高・大学生、12歳から20歳までの男女、721名(男子227名、女子494名)を対象に、1) 青少年の性感染症に対する認識度、2) 青少年の性感染症に対する知識度、3) 性感染症と自分とのかかわりについての意識、4) 青少年が分析した現状についてアンケート調査を行った。さらに青少年をとりまく環境を調査する目的で小・中・高校教諭と養護教員、および父兄の性感染症についての意識を同様にアンケート調査をした。

その結果は青少年の性感染症についての意識は学校で学習した偏った知識であり、性感染症をもっと身近な問題として認識させる必要があると思われる。また、正しい性教育を教えるべき学校教諭、父兄らの認識の甘さが目立った。学校や社会、家庭での充実した、性教育および性感染症教育が急務であると考えられた。

産婦人科の診療に従事するもの一人として、近年の若年層への性感染症の増加には危機感を感じている。例えば、クラミジア・トラコマトリス感染症は16歳から25歳までの女性は約85万人、男性は約15万人の感染者があり、年齢別推計罹患数は15歳～19歳までが23.5人に1人、20歳～24歳までが15人に1人となっている^{1,2)}。AIDSがこのような罹患率になったときのことを考えるとこのデータは背筋が寒くなるような内容である。これには性行為体験が年々若年化し、高校3年生での性交経験者が約4割に近づいている³⁾こともあるが、性感染症に対する意識・知識に問題があると考えられた。そこで青少年、学校教諭、父兄にアンケート調査を行い、今後の対策への一考とした。

対象と方法

性教育などの講演に招かれ、機会のあった、徳島県および県外の中・高・大学生12歳から20歳までの青少年721名、男子227名(中学生7名、高校生227名)、女子494名(中学生13名、高校生324名、大学生150名:医療短期大学142名、一般大学生8名)を対象に、表1のような質問表をくばり、1) 性感染症に対する認識度、2) 性感染症に対する知識度、3) 性感染症と自分との関わりにおける意識、4) 青少年が分析した現状について、それぞれ複数個の質問を設け、回答を得、集計した。また学校での教諭の意識を調査するために小学校教諭79名、中学校教諭24名、高校教諭32名、養護教員18名に対しても調査を行った。さらに父兄(30歳代:男性26名、女性99名、40歳代:男性38名、女性86名、50歳代:男性18名、女性39名)に対しても青少年とほぼ同様の質問を行い検討した。

結 果

青少年の性感染症に対する意識

1. 性感染症に対する認識度

「性感染症という言葉を知っていますか?」という設問に対して、中学生の80%、高校生の90%、大学生の98%が知っていると回答した(図1)。「性感染症について何から学びましたか?」については中学生の65%、高校生の52%、大学生の87%が学校の性教育から学んでいると回答(図2)。「どんな性感染症の病名を知っていますか?」に対しては中学生は回答した14名のすべてがエイズと答えたのだが、高校生になるとエイズは50%と減少、その他クラミジア19%、梅毒12%、淋病12%と病名の種類は増加していた。大学生に関してはほとんどが医療短期大学の学生なので種類は多くなっていたが、それでも

表1 性感染症に関するアンケート

学年() 中学, 高校, 大学, 男, 女 (をして下さい)

1. 性感染症という言葉を知っていますか
a. 知っている b. 知らない
2. 知っていると答えた方へ, 何から学びましたか
a. 学校の性教育授業 b. 本・雑誌など c. 友人・先輩など
d. 親から e. その他()
3. 知っている性感染症の病名を書いて下さい
()
4. 性感染症にかかると何らかの症状がでると思いますか
a. はい b. いいえ
5. 相手がひとりであれば性感染症にかからないと思いますか
a. かからない b. そうとは言えない c. わからない
6. 性感染症は風俗営業の人以外からはうつりにくいと思いますか
a. はい b. いいえ
7. 同時に複数の性感染症にかかることはないでしょうか
a. ない b. ある
8. 性感染症の予防はどうすればよいでしょうか
()
9. コンドームを使えば性感染症は予防できるでしょうか
a. できる b. まれにかかることがある c. わからない
10. 性感染症にかかったとき何科を受診しますか(複数回答可)
a. 内科 b. 外科 c. 産婦人科 d. 泌尿器科
e. 皮膚科 f. かかりつけの先生
11. 性感染症にかかったとき相手に打ち明けますか
a. はい b. いいえ
12. 自分はエイズにはかからないと思いますか
a. はい b. かからないとは言えない
13. 妊娠中に性感染症にかかると赤ちゃんにも感染すると思いますか
a. 思う b. お母さんだけで赤ちゃんには感染しない
c. わからない
14. いま, 若者の間で性感染症が増えているのですが, そのことについてどう思いますか
()

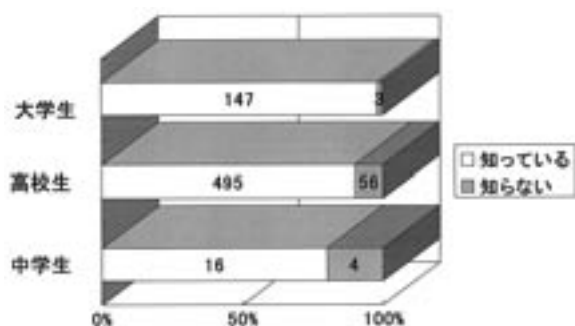


図1 性感染症という言葉を知っていますか?

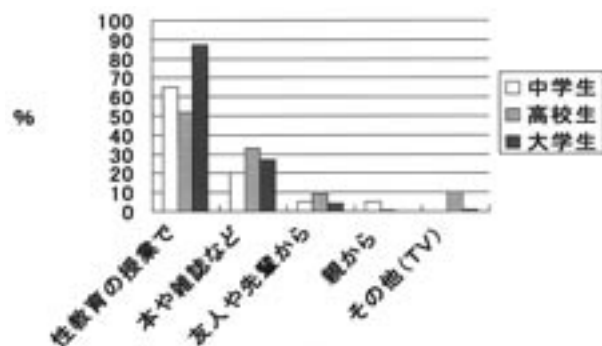


図2 性感染症について何から学びましたか?(複数回答)

過半数に達するのはエイズ、クラミジア、梅毒であった（図3）。

2. 性感染症に対する知識度

「性感染症にかかると何らかの症状が出てくると思いますか？」については中学生の70%、高校生の80%、大学生のほぼ90%が出てくると答え、わからないと答えたのはそれぞれ25%、14%、5%であった（図4）。「交際相手がひとりであれば性感染症にかからないと思いますか？」に対しては中学生の55%、高校生の80%、大学生の94%がそうとは言えないと回答した（図5）。「同時に複数の性感染症にかかることはないでしょうか？」に対

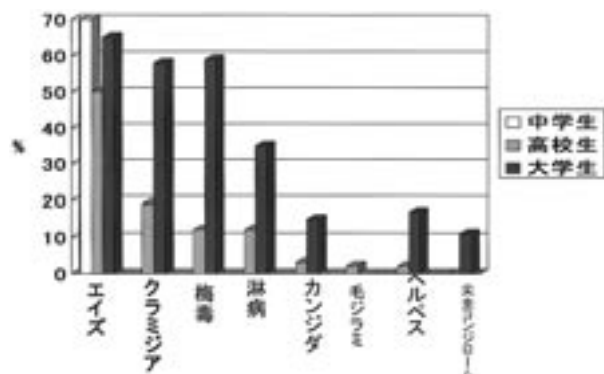


図3 どんな性感染症の病名を知っていますか？

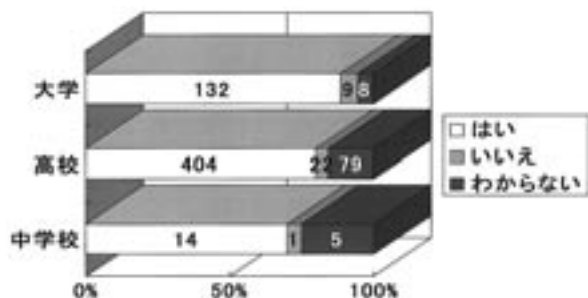


図4 性感染症にかかると何らかの症状が出てくると思いますか？

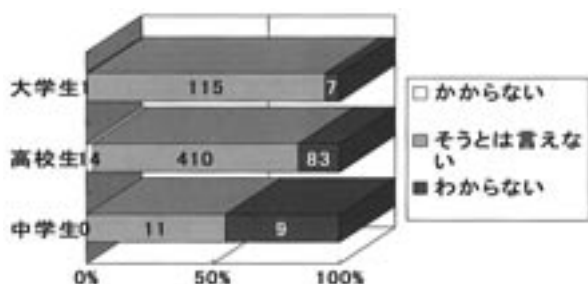


図5 交際相手がひとりであれば性感染症にはかからないと思いますか？

しては回答者のなかで「ない」と答えたものが中学生29%、高校生12%、大学生8%であった（図6）。「妊娠中に性感染症に感染すると赤ちゃんにも感染すると思いますか？」については中学生45%、高校生36%、大学生19%がわからないと答えた（図7）。

3. 性感染症と自分との関わり度についての意識

「コンドームを使えば性感染症は予防できるでしょうか？」についてはかかることがあると答えたものは中学生30%、高校生54%、大学生72%、わからないと回答したものはそれぞれ55%、20%、12%であった（図8）。「自分はエイズにかからないと思いますか？」に対してかからないと答えたものは中学生30%、高校生23%、大学生22%であった（図9）。

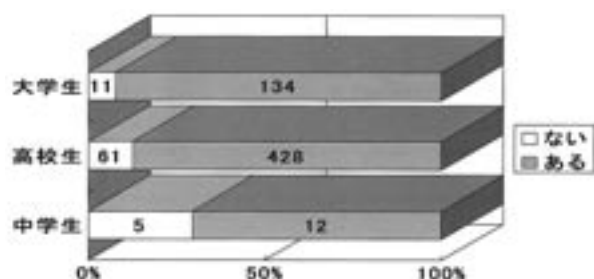


図6 同時に複数の性感染症にかかることはないでしょうか？

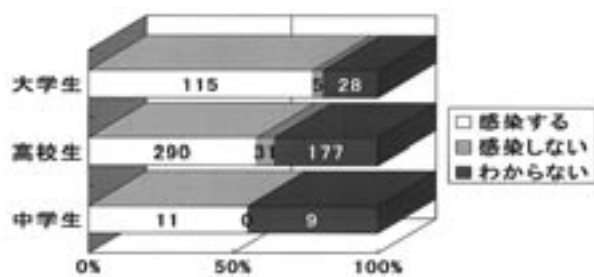


図7 妊娠中に性感染症に感染すると赤ちゃんにも感染すると思いますか？

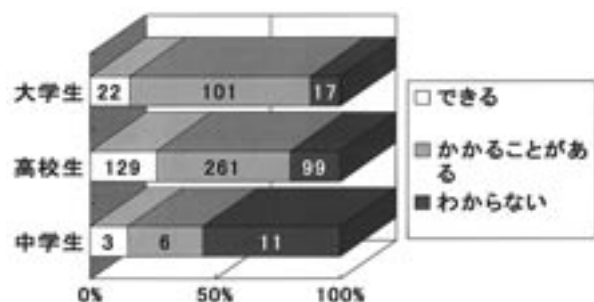


図8 コンドームを使えば性感染症は予防できるでしょうか？

4. 青少年が分析した現状

「今、若者の間で性感染症が増えているのですが、そのことについてどう思いますか？」については中学生では35%，高校生はさらに少なく28%の回答率しかなかった。その中では、「気をつけるべき」、「自分を大切にしていない」、「こわいこと」という意見がみられた。回答者の10%は「かかった人は多くの相手とセックスをしているから自業自得」という差別的な意見もみられた（図10）。「性感染症の予防はどうすればいいか？」という問いに、コンドームを使用するは中・高・大で25%，28%，48%であった（図11）。

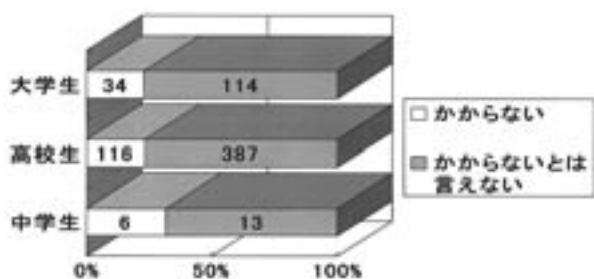


図9 自分はエイズにかからないと思いますか？

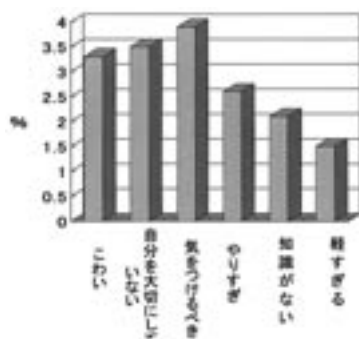


図10 今、若者の間で性感染症が増えているのですが、そのことについてどう思いますか？

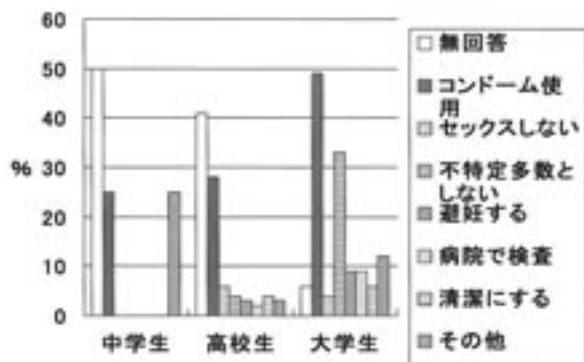


図11 性感染症の予防はどうすればいいでしょうか？（複数回答）

5. 学校教諭の性感染症に対する意識

「性感染症の広がりを実感していますか？」という問いに対して60%がしていないと回答したのは意外であった（図12）。しかしながら教諭の93%は現行の性教育は不十分であると感じており（図13）、性感染症に関する教育は、65%は小学校から、35%は中学校から始めるといいと答えた（図14）。

6. 父兄の性感染症に対する意識

知っている性感染症の病名に関しては種類が増加したが、あとの質問に対しては青少年とほとんど変わらない

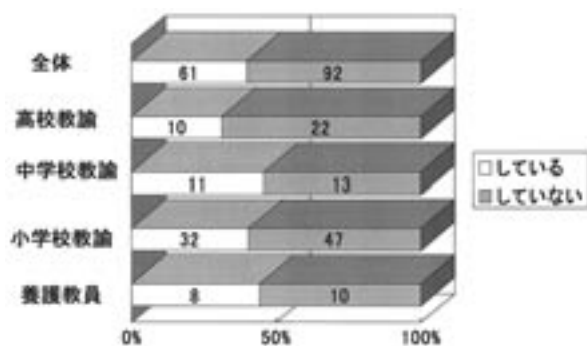


図12 性感染症の広がりを実感していますか？

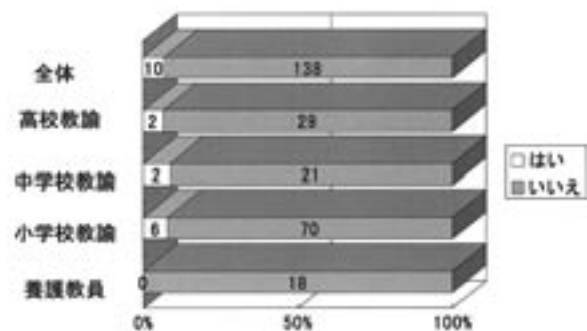


図13 現行の性教育は充分だと思いますか？

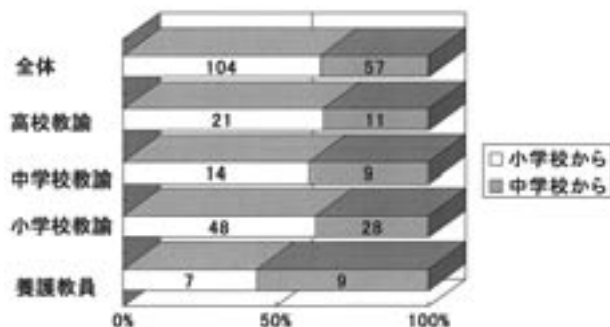


図14 性感染症に関する教育はいつからがいいと思いますか？

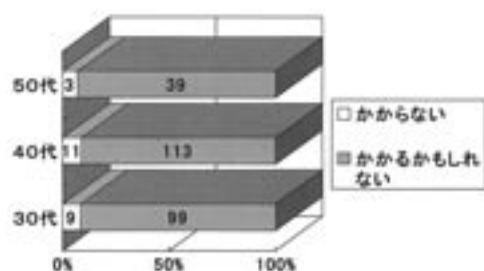


図15 自分の子供は性感染症にかからないと思いますか？

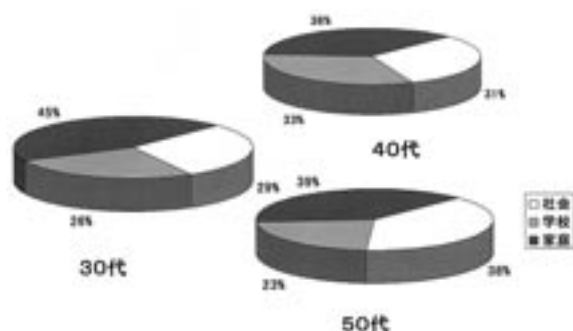


図16 今後の性教育はどこが主になって行すべきか

かった。「自分の子供は性感染症にかからないと思いますか」という質問には、かかるかもしれないと回答した者が92%いた（図15）。また「今後の性教育はどこが主になって行すべきか」については、すべての世代で社会、学校、家庭がほぼ同じ比率で行わなければならないと答えていた（図16）。

考 察

青少年間での性感染症の増加は「誰とでも」、「簡単に」、「セックスをする」という性行動に問題があるのは当然だが、性感染症に対する知識が欠けているのも一因と考え、意識調査を行った。結果は確かに年齢が上昇するにつれ、性感染症に対する知識は増しているのだが、知っている性感染症は学校で学んだエイズが多く、その他どのような病気があるのか知っているものは少なく、知識は乏しかった。これは学校の性教育自体が片寄っており、現実に即した教育が行われていないことを窺わせる。

このアンケートから得られたもっとも重要なことは、性感染症にかかると何らかの症状が出てくると考えていることである。これは父兄も同様の結果であったが、この思い込みがある限り治療は遅れ、感染は無限に広がると考えられる。

性感染症の予防についてはコンドームを上げているものが多いが、コンドームは性感染症の予防になるかという質問に対してはその効果を疑っているものが約30%から約70%あった。性器ヘルペスや尖圭コンジロームなどはコンドームで予防できないが、それぞれの病名については知らないという結果なので、コンドームの効果について病気別に違いがあると考えているのではなさそうである。

若者の間で性感染症が増加していることに関しては回答が少なく、あまり関心はないようである。

予防については年齢が進むにつれ、無回答が減少し、コンドームの使用をあげるものが増加しており、これは学習の成果であると想像する。

学校教諭の性感染症の広がりに対する認識は低く、今のところ危機感はないようである。性教育の必要性は90%以上の教諭は必要と回答していたが、具体的な施策はみえてこなかった。

父兄は性教育の必要性は痛感しているようであるが、知識は子供と同様であり、家庭で性教育をしてもらうにはまず父兄に対して性教育を充実させることが必要と考えられた。

現在は AIDS を代表に、罹患しても症状がでない性感染症が増加している。このことは治療を遅らすだけではなく、その間に多くの相手に病気を広げるという危険性がある。彼らの性行動を考え直させることとともに、性感染症についての正しい知識を教える必要がある。そのためには学校や社会、家庭での充実した、性教育および性感染症教育が必要である。

結 語

青少年の性感染症罹患率上昇の原因を探るべく、意識調査を行った。彼らの性感染症に関する知識は充分とは言えず、現状のままであれば、性感染症のさらなる広がりを抑止することは困難と考える。学校や父兄の認識も甘く、不安な限りであるが、今後は早急に社会、学校、家庭が協力して十分な対策を立てることを望むものである。

文 献

- 1) 熊本悦明, 塚本泰司, 野口昌良 他: 日本における性感染症 (STD) 流行の実態調査 1999年度のSTDセンチネル・サーベイランス報告, 日本性感染症誌, 11: 72-103, 2000
- 2) 熊本悦明, 塚本泰司, 野口昌良 他: 日本における性感染症 (STD) 流行の実態調査 2000年度のSTDセンチネル・サーベイランス報告, 日本性感染症誌, 12: 32-67, 2001
- 3) 1999年度調査「児童・生徒の性」 東京都・小・中・高・障性教育研究会

A study on the sense about sexually transmitted disease in Japanese younger generation

Mika Kawano

Kawano Mika Ladies Clinic, Tokushima, Japan

SUMMARY

Recently the infection's rate of Sexually Transmitted Diseases (STD) in Japanese younger generation has increased rapidly. I thought one of some causes existed on their sense about STD. In the present study, to know any factors and problems, I examined the sense about STD in younger generation. I conducted some questionnaires of 721 students (227 boys and 493 girls, 12-20 years old) on their 1) recognition of STD 2) knowledge of STD 3) thinking of relation between themselves with STD 4) analysis of the present condition. Moreover, I tried to conduct the same questionnaires of their teachers and parents to know their environment.

In conclusion, a lot of students received the knowledge on STD from school. The knowledge about STD in younger generation was partial and inadequate. It is necessary that they have to recognize STD as the urgent and important problem for themselves. Moreover, their teachers and parents, who have to give the enough and right education to younger generation, also lack the sense that STD is a big problem. I suggest that the public, school and parents have to coordinately educate younger generation about the actual and exact knowledge on sex and STD in haste.

Key words : STD, younger generation, chlamydia trachomatis, questionnaire's analysis